
底をつく患者300人、職員700人分の食料

(由井りょう子ほか・著、石巻赤十字病院の100日間、東京、小学館、2011、p.75-84)

2012年10月26日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

同論文は、2011年3月11日の東日本大震災発生から～同月27日までの16日間、石巻赤十字病院の患者・職員に供給される食料がどのように変化していったか、食料を供給するために職員がどのように動いたのかを追ったドキュメンタリー形式で書かれている。震災発生から復旧・支援が進んでいく各段階で、何が問題となったか、それらがどう解決されていったか、時系列に沿って見ていくことができる。

3/11 地震発生当日

同病院の地下倉庫には、400人分の食料3食3日分が備蓄されており、食事のとりにくい患者に合わせておかゆ等も用意されていた。ガスが復旧しなかったため、入院患者にはこの非常食を提供することが決まった。エレベーターが停止していたため、職員60人がかりでこれらの非常食を地下から病棟まで階段でバケツリレー式に運搬・配膳した。食べられない患者には液体の栄養剤や薬剤が用意された。

職員700人分の翌日の朝食を用意するよう要請があり、栄養士たちは5人という少ない人数で非常電源を使ってごはんを炊き、一晩中おにぎりを作りつづけた。

3/12 地震発生翌日からの数日間

日赤本社・石巻市に支援を要請。日赤本社から支援物資が届き始めたが、食料は患者優先であり、不眠不休で動き回る職員の食事は粗末なものにならざるを得なかった。13日から後は、支援物資のおかずが少しずつ食事に添えられたが、栄養に偏りはあり、数も十分とはいえなかった。支援物資の中でも、賞味期限のきれいな菓子パンや、加熱調理の必要な冷凍肉等は患者に提供することができなかったため、菓子パンについては職員で消費、冷凍肉については電気が復旧して冷蔵庫が使える、またはプロパンガス等で調理のできる職員が持ち帰り、近所の住人と分け合って消費した。

また、病院内外には避難してきた人があふれかえっており、空腹をかかえているのが分かっていたが食料は患者・職員の分を用意するのが精いっぱいであり、運ばれてくる食料がその人たちの目に触れないよう気を付けることがせめてもの配慮であった。

3/18 テレビ中継後

3/18 全国放送のテレビ局が病院前からの中継を行い、食事提供を担当している栄養士が、カメラの前でありのままの食料事情を訴えた。結果、その日のうちに反響があり、大量の生鮮食品や無洗米、調理のいらぬ冷凍食品などが届き、献立にバリエーション

がつけられるようになった。24日にはガス発生装置が稼働したおかげで煮炊きができるようになり、温かい食事が出せるようになった。27日には全国チェーンの牛丼店による炊き出しも始まった。

<全体を通して>

地震発生からひとつひとつ復旧・支援が進んでいく一方、その各段階で新たな問題が発生していることがわかる。この論文に書かれているのは震災発生から1か月までの経過のみだが、この後もさらに新しい問題が発生してくるのだろう。また、食料が患者優先であるということをはじめ、病院という現場ならではの事情も読み取ることができる。

支援物資が届いたり、炊き出しが開始されたりと解決されていく問題がある一方、外部からの支援者のための食料確保が困難であったことや病院外にいる避難者の食料支援にまで手が回らなかったことなど、その時点では解決できなかった問題もあることが分かる。同論文を読むことによって、このような状況を現実的に想定して対策を考えることができるのではないだろうか。